讀賣新聞
1993年（平成5年）4月20日（火曜日）
社会　13版☆（22）

泉

追悼マラソンで完走証

十四日のこの欄で紹介した奈良市の「登美が丘カトリッククラブ」の山本広志さん追悼マラソンが十八日、大阪市の長居公園でありました。「泉」を読んだ同市内の他のクラブのメンバーらも特別参加、約四十人が集まりました。

フルマラソン完走が夢だった山本さんは、先月七日、この周回コースで行われた大会に初挑戦。十五周すべきところ、あと五周、十四㌔を残してリタイアし、六日後に急死しました。その夢をかなえようと、クラブの仲間たちがこの日、残り五周を走ることにしたのです。

青空が広がり、汗ばむ陽気の中、スタート地点には、五十四歳で急死した山本さんの遺影が飾られています。その周りを仲間たちがぐるりと取り囲み、午後零時五十分、「山本さんの面影をしのび、おおらかに、明るく走ろう」という掛け声とともにスタート。

遺影を抱いたメンバーを先頭に妻の三栄子さん（五二）、長女の仁美さん（三三）、二女の久美子さん（三〇）、そして、このことを「泉」に知らせてくださった出版社「水琴社」の池羽田靖子さん（五一）も一周だけ走ります。

ゆっくり、のんびりの約束が、いつの間にかピッチは上がっていきます。最後は全員手をつないでゴールイン。タイムは一時間二十二分二十二秒でした。

先月七日の大会を主催した新日本体育連盟大阪府連の川野弘之事務局長（四九）から三栄子さんに山本さんの完走証が手渡されました。そこには山本さんがリタイアしたときのタイムにこの日の分を足した四時間十二分二十二秒が記されていました。

完走証を手に三栄子さんが言いました。「果たせなかった夢、消えた夢を皆さんにかなえてもらい、主人も天国で喜んでいると思います。私たち家族も幸せな気持ちでいっぱいです。本当に、本当にありがとうございました……」。

最後は涙声でした。